

2005年度 森村・川村ゼミ議事録

4月20日分

司会者: 山田

記入者: 深井

文献:『バウハウスとその周辺 I 1920年代美術とバウハウス』

発表グループ: A(武道・島村・元島) B(岩永・小椋・鯨井)

◇連絡事項(個人提議)◇

- ・今日からFBSを記入
- ・春合宿は5月4～5日 三浦に決定!
- ・森村先生より、演劇鑑賞の案内
- ・川村先生より、23日土曜日 NADiff 原宿店にて行われる「アーキタイプス展」の案内
- ・なっちゃんより、5月15日に行う演奏会の案内

◇議題◇

- ① なぜ、バウハウスの中にダダが関係していくのだろうか? バウハウスとダダの関係は?
- ② バウハウスは、平面から造形へと芸術を生活に近づけていき、強い勢いで社会に影響を与えた。そのことについて、今において考えてみると、どうであろうか?
- ③ バウハウスは何をしようとしたのか? 何のためにできたのか?
- ④ もし今もバウハウスが続いていたとしたら?
- ⑤ 人間の生活は芸術によって影響を受けるのか?

◇グループの考察◇

A: もしもバウハウスが閉鎖されず、続いていたとしたら、その理念は常に新たなものに變化していったのではないだろうか。グロピウスの「理念は變化し続けなければならない」という言葉より、バウハウスを様式としてだけではなく、精神として学んでいくことができるのではないだろうか。

B: バウハウスの誕生、根っこの部分に着目した。そこから、新しいものが社会に受け入れられるには時間がかかると考えた。バウハウスはナチスによって閉鎖されたが、それはバウハウスが社会に影響しうる大きな力を持っていたからではないだろうか。

◇議論の展開◇

議題①:

- ・ダダは実際にやっていたことより、いかに存在を宣伝するか先行していた。
→伝達するためのデザインを行っていたといえる。
- ・バウハウスとダダは、それまでのことに「対する」「否定する」という新しいことをつくり出す点でつながっていた。
- ・ダダの「破壊・否定の精神」がバウハウスの新しいものを生み出す原動力となったのでは。
- ・地域的なことが考えられるのでは。わりと活動が近い地域間で行われていたという点。

議題②:

- ・バウハウスの時代にも現代においても、人間には常に「新しいものを生み出そう」という精神がある。
- ・ガラスや鉄を使うことが新しかった。戦争といった社会状況への反発を芸術に表していた。芸術を通して個人が社会に対して訴えていく表現の場を見つけたのではないか。

議題③:

- ・社会をよりよくするために、環境をよりよくするためにバウハウスはできた。根底にあるのは、人々の生活のために、平和のために行っていた。
- ・文献P9下から5行目:「芸術を生活レベルの事象において実現しようとした」ということから、「日常生活」がポイントとなる。×美術学校→○職人学校
- ・今までのもの、新しいものを継承させ発展させていくためには、教育機関が最適な場である。

議題④:

- ・マイスター制度は今もドイツである。→ドイツだったからこそバウハウスは実現した。
- ・ニュー・バウハウスについて、続かなかつたのは… アメリカの土地柄に合わなかつた
→地域性
- ・なぜ、大戦後ドイツで復興しなかつたのか? →限界を知ってしまったから。芸術が権力と結びつくことを恐れたため。民族意識の高まり、地域性を出し自分たち独自の考えでつくっていきたいという思いが生まれてきたため。

議題⑤:

- ・あまりにも日常に根ざしており、現状に危機感がないため、影響を受けたという実感が
ない。
- ・本などで思想を読んでも距離を感じてしまう。
- ・芸術は誰にでも共通する、全体に力を及ぼすものである。
- ・芸術を深刻には捉えず、「楽しい」という程度の感覚で捉えている。
- ・生活に密着している。その時代時代を映し出すものである。

◇記入者の考察◇

初のグループ発表ということで、議論の展開がどうなるか気になっていたが、次々と意見や疑問が出ていったので、良かった。両グループとも、文献をただ読み解くというのではなく、疑問に思った点や興味を持った点などを提示してくれた。それによって、文献の内容やバウハウスの概要を理解しただけではなく、社会背景や地域性、民族性、人間の精神についてといった、幅広い視点で議論ができた。また、芸術と社会、芸術と自分について皆の意見を聞いたことが大きな収穫となった。私が最も興味深かったのは、「ドイツだからこそバウハウスは実現できた」という見解であった。次回の発表に活かせる、議論であった。